無限問題

城宮　美玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限問題

【Ｎコード】
Ｎ６３４３Ｘ

【作者名】
城宮　美玲

【あらすじ】
あたしの好きな人は、双子だ。その片方をあたしは好き。そして親友もいる極々普通の高校生・・・のはずなんですが、あたしの通っている学校・・・少し変わっているのです。
さまざまな事件・問題が起きながらも徐々に恋も進んで行く……
スローテンポな奇想天外ラブコメデイー。

第一話　あたしと親友と双子と・・・・

突然ですが、すばり！あたしの好きな人は、双子です。

だからって二人共好きな訳ではないですよ？って言うか・・・・見た目は別として、性格が二人共違うのです。

まず双子・兄の季野（きの）　秋（しゅう）は、クールでいかにも出来る奴って感じで若干ヘタレ気味・・そして眼鏡を掛けています。でも短気で怒りっぽくて・・・・しかも淡々と怒るので迫力倍増です・・・・ううっ思い出しただけで・・・・。そして、なんとなくですが秋は、あたしの親友が好きなのではないかと思います・・・・よく見つめてるし・・・・。なんだかんだで、あたしが好きなのは、この秋なんだけどね・・・・。。制服は、ネクタイもちゃんと締めてワイシャツの第一ボタンまで締めて・・・・ブレザーの前も締めて・・・・真面目な優等生。制服をちゃんと着るだけで優等生になれるなら、あたしも着るんだけどなー。

次は、双子・弟の季野（きの）　夏騎（なつき）は、いつでも笑顔で誰にでも優しくてマイペース！心が広いので怒る事は、あまりありません。仕草が紳士と言うか・・・・レディーファーストが分かってると言うか・・・・。でも時々悲しそうな顔をするのは何故だろう？そして秋とは逆に冷静なのですが・・・・頭の方があまり良くないので・・・・補習仲間でもあります。制服のネクタイは付けては、いるのですが緩めていてワイシャツの第一ボタンとブレザーの前も締めていないのです。親しみやすいから良いとあたしは、思う。

そしてあたし、節中（せつなか）　春香（はるか）は、明るく活発！勉強は苦手だけど運動・スポーツなら負け知らずで補習の先生にはお世話になってます。そして秋が好き！もう四六時中見ていたいくらいＬＯＶＥ、これには

親友も呆れる程。制服のリボンは付けてワイシャツの第一ボタンは外し、セーターを冬には着ます！スカートは、もちろんミニですよ・・・フフフ。よく変わっていると言われるあたしですが・・・このあたし達が通っている学校自体が少し変わってます。

・・・・・・・・おっと！忘れる所だった・・・。あたしの親友を紹介しないと！

あたしの親友、松永冬音（まつながふゆね）は、常に冷静沈着でクールな毒舌。憧れる女子も少なくない。まさに異性より同性にモテるタイプ？そして他人の恋愛事情に頗（すこぶ）る詳しい。なんでそんな事まで！？と言うような情報まで・・・一番敵に回してはいけない人だと感じている。男子より男前です。まあ、そんな冬音と何であたしみたいなのが仲いいのかって聞かれると・・・何でだろう？ってなるんだけどね。制服は、リボンじゃなくてネクタイでセーター（灰色）は、指先が少し出る位の大きさ。スカートは膝よりやや上？ミニまでは行かない感じです。

「あれ？どうしたの？」

噂をすればで、冬音が首を傾げながらあたしに向かって歩いて来る。あたしは、冬音に顔だけ向けた。

「別にどうもしないよ？」

「いや、周りがゴキ●●で騒いでるのにあんただけ上の空だから」

「ゴキ●●ごときで騒がないよ」

溜め息を吐いた後、冬音は呆れたように言った。

「聞いてなかったんだ。サイエンス部の部員が誤って近くにいたゴキ●●に危険な実験前の薬品をかけちゃったんだよ」

「それでゴキ●●は？」

「かなりの大きさになって校内を駆け巡っております」

「それかなりの大事（おおごと）だよね。冬音が冷静だからそうでもないと思ったら大事だよね」

そう言った直後に秋が急ぎ足であたし達の方へ駆けてきた。

「春香、無事か？」

「あっうん！」

「なんで春香だけなの？私も居るのに」

横から冬音がジロリと秋を睨んだ。秋は、眼鏡の縁を指で押す。

「いや、見た目無事だから」

「それ言ったら春香も無事でしょうが・・・・」

「春香は、か弱いんだ！松永と一緒にするな」

「お前は春香の保護者か」

腕を組んで冬音は、壁にもたれ掛かった。そして少し俯く。

「これからどうするんだろう？」

「サイエンス部が元に戻す薬品を開発中らしい。出来るまで辛抱するしかないな」

今更ですが、こんな事件は日常茶飯事です。主にサイエンス部と何らかの事がキッカケで起こります。

「そう言えば、季野君は？」

「夏騎の事か？それなら、さっき購買にパンを買いに行ったぞ」

「どこまでもマイペースな・・・・」

冬音は、いつもの事なので諦めているのか溜め息を吐いただけで後は何も言わなかった。

本日二回目の噂をすれば、夏騎がパンを持ちながらこちらに歩いてきた。秋以外歩いて来るな・・・・あたしの所に。

「三人、固まってどうかした？」

「騒ぎについて話してたんだ。ゴキ●●が校内にいるって言うのによく食えるな？」

「腹が減ってはなんとやら・・・・だからね」

そう言って夏騎は、パンを食べ始める。そして秋も夏騎からパンを受け取り食べる。ハァ・・・・かっこいいなー。イケメンは、何をして

も絵になるよ。

「何、うっとり見てんの？」

あたしにしか聞こえない声で冬音が言う。慌ててあたしは顔を逸らした。

「み・・・見てないもん」

「秋を見てたでしょ」

なんで分かるんだろう・・・夏騎と秋は隣合わせだからどっちを見てるかなんて分からないはず・・・。

「まあ、どっち見ててもいいけどね？私は」

そう言ってから冬音は、夏騎と秋に近づいて行った。あたしは、冬音の後ろから付いていく。

「二人だけずるいなーパン」

「ごめん、二つしか無くて」

夏騎は、申し訳なさそうに苦笑した。すると、横から秋が言った。

「それなら、少し分けてやるよ」

「上から目線ムカツクな！でも分けてほしい」

突っかかりつつも冬音は、パンがほしいらしい。そんな冬音に対し

て秋が溜め息を吐いた。

「誰が松永に分けると言った？これは、春香に分けるんだ」

「ええっ！あたし？」

「えこひいきだ！えこひいきー」

納得がいかないようで冬音が不機嫌になる。あたしは、冬音をなだめてから秋の差し出すパンを見た。思わず唾を飲む。

だってこれって……間接キスと言う奴ではないですか！

「顔が赤いけど大丈夫か？」

「だっ大丈夫！あたし…あんまりお腹空いてないから秋が食べて良いよ？」

今のあたしに間接キスは、無理でした……せっかくのチャンスをーーー！と後で後悔する。

「春香がいらないなら私が！」

「お前にやるパンはない……と言うか本当にない。俺が食べたからな」

「とことん嫌味だ……」

秋は勝ち誇った笑みでパンの入っていた袋を冬音に見せ付けた。さっきの今でもう食べたんだ……と言うか今の秋かっこ悪っ。

「季野くんは、くれるよね？」

冬音が半泣きだ…そんなに食べたかったんだ…パンを。ただのパンだよ？冬音って食べ物に関してだけは、変な執着を持ってるんだよね。

「可哀想だから全部あげるよ」

「わーい！フッ……双子なのにこんなに優しさに違いがあるなんてねー？」

パンを得たと同時に冬音の弱気は、なくなった。すごいなパンっ！

《……サイエンス部が元に戻る薬品を完成させ、出来事は解決しました。まだ小さくなったゴキ●●がいるかもしれないので見つけた方は後を宜しくお願いします》

「解決したんだねー？」

「まだいるかもしれないんだって。春香、足元には気をつけなよ？」

「冬音、心配しなくて大丈夫だよ！あたしがそんなへま、する訳」

グシャ……

あたしの足元から嫌の音がした……。足を上げて見るのは……かなり怖い……。

「イヤーーーー！」

「落ち着けっまず救急車をだな…」

「季野君が落ち着け……」

後日、上靴を買い換えたのは、言うまでもない事でしょう。

続くのでした。

第二話　勉強とパンと約束と…

「ＮＯー！！」

頭を抱えてあたしは、叫んだ。耳を抑えて、顔をしかめながら冬音は、言った。

「いきなり何？」

「もうすぐテストだよね？」

「焦ってるんだ？勉強真面目にやってないから」

冬音は、余裕綽々であたしを哀れそうに見た。

「だってー」

あたしは、涙目になりつつある。

教室のドアを開けて、秋が近くに来た。

「松永、また春香を泣かせてるのか？」

「私がいつ春香を泣かせたって？春香を泣かせてるのはテストだよ！テ・ス・ト！！」

今すぐにもバトルが勃発しそうな雰囲気。冬音と秋は、お互いを睨みつける。

そこへ、夏騎がまたパンを持ってやってきた。

「また喧嘩？」

「私、春香を泣かせてないよね！」

「え？どちらかと言えば泣かせているのは、勉強とテストじゃないかな」

「ほらー♪」

勝ち誇ったように笑いながら冬音は、腰に手を当てて胸を張った。

「無い胸、張って…」

呆れたように秋が言う。

これは、また喧嘩が始まりそう…。

「うっさいなー！胸だけが全てじゃない！」

「ない奴が言いそうなセリフだな」

ああっ！なんで二人共、喧嘩するのかな？秋を睨む冬音の肩を夏騎が叩く。

「パン、いる？」

「え……いいの？」

冬音が目を輝かせて夏騎を見た。冬音は、パン本当に好きだなー！

この雰囲気でパンは、どうかと思ったけど…夏騎ナイス！！

あたしは、夏騎に向かって親指を出した。夏騎は、それに気づいたようであたしに微笑んだ。

うわー顔同じだから思わずときめいちゃったよ……。眼鏡なかったら、どっちがどっちかあたし分からないかも。

「話は、戻るけど本当にテスト大変だと思うんだよね。今の春香では」

「俺も今の夏騎ではテストが大変だと思う」

「珍しく意見が合った……じゃあ今日、早速勉強会しない？」

やっぱりこの展開か……薄々こうなるんじゃないかって思ってたけど……。

あたしは、夏騎を見た。夏騎もこうなると思っていたのか特に驚いていなかった。それともポーカーフェースなだけ？

「でも誰の家でやるんだ？勉強会」

あたし達の意見まだ言ってないのに話が進んでいる……。まあ、嫌だって言うに決まってるというか嫌って言うから当然と言えば当然なんだけどね……。

「私の家は、事情があってダメなんだよね。春香の家は私が許可し

ない！男を春香の部屋に入れるなんてとんでもない事だよ」
「松永は春香の父親か……って事は消去方で俺達の家になるな」
「秋たちの家かー！見てみたいかも……楽しみだなー」
「それ位勉強も楽しめたらね……」
溜め息を吐いて冬音が呟いた。そしてその隣で秋も溜め息を吐いて言った。
「夏騎も楽しんでくれればいいんだけどな……」
なんか後半、冬音と秋の意見が一致している……仲いい事は、いいんだけど……。
ちょっとヤキモチを焼いてしまう。試しにあたしは、聞いてみた。
「じゃあ二人は、勉強楽しい？」
「俺は楽しい。色々知る事が出来るからな」
「え？私は、全然楽しくないけど」
冬音から意外な言葉が出た。秋は、目を見開いている。
「じゃあなんで成績上位なんだよ」
「知らないよ……でも楽しめば上がるんじゃない？」

「じゃあ春香が楽しんで勉強やったとして、学力が上がるか？」

三人は、あたしに注目した。

「……上がるよ？」

「間！その間が一番傷つく！そして何故、疑問系！」

「だってハッキリ言って春香の学力が上がるなんて皆無だから」

「随分ハッキリと……」

とにかく、あたしは勉強会に行かないといけないようです。多分どんなに嫌がっても強制的に連れて行かれる。

でも秋と夏騎の家に行けるんだー！でも勉強会とはいえ……いきなり家は、ハードではないでしょうか？

続きますよ！

第三話　虫と騒ぎと餡蜜と…

昼休みのチャイムが鳴り、あたしは冬音の席へと歩いて行った。

「食堂行こう！」

「えー…餡蜜付ける？」

「付ける」

「じゃあ行く」

そう言って冬音は、すぐに立ち上がった。即答ですか…ちゃっかりしてるなー。

食べ物に釣られるんだよね…知らない人でも食べ物もらったらついて行っちゃいそう…。

「食べ物もらっても知らない人について行ったらダメだよ！」

「何を突然…私は小学生か…」

「そうだ！秋達も誘わない？あっでも今日、お弁当かな？」

あたしは、秋達の居る教室を覗いてみた。

「居る？」

隣から冬音も教室を覗く。

「居ないみたいだね」

「どこに行ったんだろう？」

「さあ？居ないんじゃ仕方ない…」

冬音は、セーターのポケットに手を入れて廊下を歩いて行く。

「ちょっと冷たいんじゃないの？」

「餡蜜が先」

冬音に続いてあたしも、ついて歩く。

「双子か餡蜜だったらあたしは、双子を取る！」

「そんな自信たっぷりに言われても…と言うか春香の場合…」

「双子じゃなくて秋を取る！」

「だと思った…」

食堂に着き、食事を終えて冬音が餡蜜を食べようとした瞬間、校内放送が聞こえてきた。

《只今、学校内の昆虫観察で使う予定だった昆虫が入っているケージをサイエンス部の部員が誤って壊してしまい、校内に昆虫が逃げ出しました。甘い物をお持ちの生徒は、ご注意ください》

「またサイエンス部だって…」

「サイエンス部以外が問題を起こした事なんてあった？」

「ないね…」

逃げ出した昆虫、どうするんだろう？もちろん捕まえて戻すんだろうけど…。

でも、どうやって捕まえるんだか…。

「あ…季野くん達だ」

「え？」

食堂の出入り口の方で、秋達が何かしていた。

近づいて声をかけてみる。

「何してるの？」

「さっき昆虫が逃げ出しただろ？だから罠を設置してるんだ」

「偶然近くにいたのが僕らだったから手伝わされて…」

「お前は、すぐにサボってたがな…」

秋達の仕掛けた罠に、少し経ってから昆虫達が集まって来た。

「あれ？」

昆虫の数を数えながら、秋が首を傾げる。あたしは、罠に引っかかっている昆虫達を見た。

「どうしたの？」

「三匹足りない……」

「どこ行ったんだろう？」

そう言ってから、あたしは周りを見回した。周りにいるとは決まってないけど、なんとなく見回してしまう。

「三匹くらい、その内出てくるでしょ？踏んでなかったら」

「確かにその通りだけど、なんて事言うの…」

「私は、餡蜜食べてくる」

冬音の言葉を聞いて、秋が顔を上げた。

「餡蜜？……止めておいた方がいいんじゃないか？」

秋は、目を逸らして眼鏡の縁を指で押しながら、そう言った。冬音は、不満そうに顔をしかめる。

「嫌、私は食べるよ」

そう言って冬音は、食堂に入っていき……少ししてすぐに戻って来

た。

「どうしたの？餡蜜は？」

冬音は、力なく首を横に振った。

「食べられない……」

「どうし……！？」

あたしの前に冬音が差し出した餡蜜を見て、どうしてなのかすぐに分かった。

餡蜜に三匹の昆虫が……。

「もしかして、残りの…？」

「ああ、餡蜜と聞いてなんとなく予感は、していたが……」

そう言って秋は餡蜜に付いている昆虫三匹を取り、ケージに入れた。そして餡蜜は、もちろん食べられないので……。

「私は一体今日のデザート、何を食べればいいの？」

「今日くらい、我慢しろよ…」

呆れながら秋が言った。フラフラと冬音があたしの所に歩いてきて両肩を掴んできた。

「ううー、春香ー」

涙目だし、もう冬音半泣き状態…。あたしが困っていると、夏騎が冬音の肩を叩いた。

冬音は、振り返る。

「実は、チョコが余ってるんだけどいる？」

「是非ください！」

両手を出して冬音は、夏騎に言った。夏騎は何処からかチョコを出して冬音に渡した。

「デザートの恩人！今度何かお礼します」

「楽しみにしてるよ」

「大袈裟な……」

あたしと秋は、冬音のデザートに対しての執着に呆れて思わず溜め息を吐いてしまうのだった。

後日、授業のその昆虫を観察する事になり……。

「あたし達のクラスで使う昆虫だったんだ……驚いたね？冬音…？」

「先生ー松永さんが倒れましたー」

餡蜜台無しにされちゃったんだっけ……。あたしは、また溜め息を吐いた。

続く……？

第四話　勉強会と部屋と教科書と…（前編）

只今、放課後。冬音は、体力切れで机に伏せている。

え？勉強会は、第二話の日にやったんじゃないかって？

あの日は、冬音の都合が悪くて無しになったのです。

まあ、第二話とか言ってる時点で、あたしは変なんだと思うけどさ？

「行くんだっけ？今日、季野君達の家に」

「うん…だってもうすぐテスト近いし…」

「この世からテストなんて無くなればいいのに…」

冬音は、なんだかアンニュイみたいです。そんな冬音を私は、宥(なだ)める。

「まあまあ…。秋達、まだ教室にいるかな？」

「見て来れば？私は、もう動きたくない…」

「じゃあ見てくる。ちゃんと動けるように休んでてね？」

「はいはい」

顔を伏せて、冬音は手だけをあたしに振った。あれ？この場合、冬音の様になるのは、あたしなのでは…？

そんな事を考えながらあたしは、教室を出て秋達の教室を見る。

「えーと…あっ秋！」

「ん？春香か、どうした？」

「今日、勉強会なんでしょ？まさか忘れてたんじゃ…」

「忘れてたらこんな事しない」

そう言って手錠を付けられた夏騎を前に出した。

「ぱっと見したら、なんか問題起こした人だよ！可哀想だから止めてあげて！」

「…春香が言うなら…」

秋は、渋々承知してくれた。

解放されて夏騎は、一息ついている。

「ありがとう」

と言って夏騎は、あたしの手を握った。

「あっいえ…」

って…あたしは、なんでこれだけで赤くなってるんだ！純情な乙女か！いや、そうだけど…。

でも、秋以外にこうなるのは…。
そんな事を考えている間も夏騎は、ずっと手を握っている。
「季野くん…」
フラフラと覚束ない足取りで、冬音がやって来る。
「どうしたんだ？いつもの覇気がないな」
「うっせーよ、お前に用はない」
「不機嫌なので少しの口の悪さは、許してあげて……」
今にも喧嘩が始まりそうなので、そうなる前にあたしは冬音に言った。
「秋じゃなくて夏騎に何か用なの？」
「お菓子を恵んでください」
「今日は持って来なかったの？」
冬音は、あたしを見て溜め息を吐いた。
「持ってきてたら頼まないでしょ？」
「そりゃそうだ」

あたしが頷くと、隣で秋がズボンのポケットを探っていた。
そしてポケットから飴を取り出すと、冬音の前に出す。
「夏騎は今日、何も持ってないんだ」
「チッ」
冬音は、あからさまな舌打ちをすると秋から飴を奪い取った。
本当に秋の事、嫌いなんだな…。でもちゃんと飴は、食べるんだよね…。
「ところで…そろそろ学校出ないと勉強会の時間なくなるんじゃないのか？」
「それはそれで良い！」
「お前だけやれや」
「じゃあ僕逃げるから」
「おいっ真ん中の奴！」
あたし達は、秋によって強制連行されました。冬音に至っては、飴を没収されて尚更不機嫌。
季野家の家は、一言で言うと…とにかくデカイ。広い庭まであり、執事にメイドまで……。

「お金持ち…？」

「部屋どこ？」

冬音は、家そのものより二人の部屋が気になるらしい。あたしもどっちかって言うと部屋の方が気になる。

「俺と夏騎の部屋、二つあるんだがどっちにする？」

「お前の部屋、本とか参考書がごっそり置いてありそうだな…。正直言ってやる気が失せる」

「松永は、いつもやる気がないだろ…」

「じゃあ消去法で夏騎の部屋？」

そう言ってあたしは、夏騎を見た。続いて秋と冬音も夏騎を見る。

「別にいいよ」

夏騎は、部屋まであたし達を連れて行くとドアを開けた。大きな窓とベッドと机にテーブルと本棚と言うシンプルな物しか置いてない部屋だった。

「意外ー！もっとゴチャゴチャしてると思ってたのに…」

「春香に僕は、どう見えてるんだろうね？」

部屋を眺めていると、なんだかよく分からない箱が置いてあった。

「この箱は？」

「ああ、それは……」

夏騎が答える前に冬音が勢い良く箱の元へと走り、開けた。

「たっ宝箱…」

「宝箱！？」

何か如何わしい物でも入っていたり…？そんな期待と不安を抱きながらあたしも箱を覗いて見た。

しかし想像していた物と全く違う物がその箱には入っていた。

「大量の……雨？あっ間違えた。大量の飴？」

「これは？」

冬音とあたしは、夏騎に視線を移す。まさか夏騎って甘党なの？

「松永さんが飴をよく食べてるから予備にいつも僕が持ってるんだよ。今日は忘れてしまったけど」

「神様」

「冬音は、飴持ってれば誰でも天使か神様だよね？」

秋は、椅子に座り教科書とノートを開き始めた。

「そろそろ勉強会を始めないか？」

「そうだね！冬音、教科書とノートは？」

あたし達、三人も椅子に座り教科書とノートを開く。

あたし　秋
テーブル
夏騎　冬音

と言う感じで座っているので、あたしはドキドキしっぱなしだし秋と冬音は睨みあってるし、夏騎は一人で問題解き始めちゃうしで散々なのです。

「ここどうやって解くの？」

秋は、冬音を睨むのを一旦中止してあたしの教科書を覗き込む。あまりの至近距離に自分の心臓の音が聞こえてしまうのではと心配した。

それにしてもまつげ長い…サラサラの黒髪にキリっとした目元…。思わず眺めてしまう。

「ここはだな…ん？俺の顔に何かついてるか？」

「ううん！続けて？」

「…ああ…」

教科書に視線を戻して、また秋は話し始めた。あんまり見過ぎると

不自然だよね…。

あたしは視線をなんとなく夏騎に移した。夏騎と目が合い、あたしは何故か顔を逸らした。

なんで顔を逸らすの？あたしは秋が好き……でも夏騎にドキドキしてる……。秋が好きだから顔の同じ夏騎にドキドキしてるの？それとも、夏騎が好きでドキドキして、顔の同じ秋にドキドキしてるの？

あたしが好きなのは……どっち？

！

後編へ続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6343x/

無限問題

2011年10月21日02時05分発行